【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	愛媛県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	宇和島市立住吉小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	2	１４	２２
児童数	５３	４９	５４	５７	６１	４８	6	３２８	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

豊かに表現する児童の育成
－「自力で読む力」・「思いを伝える力」を重視して－

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

全学年・国語
全ての教科の基礎・基本となる力として、国語を取り上げた。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度

ア　実践研究主題
豊かに表現する児童の育成
－「自力で読む力」・「思いを伝える力」を重視して－

イ　研究のねらい
個に応じた指導や授業改善を通して、児童一人一人の自力で読む力を育てていく。その中で、自分の思いや考えを積極的に伝え合い、学び合い、豊かに自己表現できる児童を育成する。

ウ　研究の仮説
○　目標を明確にし、個に応じた内容や方法を工夫すれば、自力で読む力を育てることができるであろう。
○　指導過程において、さまざまなかかわりを大切にしながら、対話・交流を取り入れれば、主体的に心豊かな表現ができるようになるであろう。
○　一人一人の読む力や表現力の実態を的確に把握し、指導に生かすことができれば、児童の意欲が高まり、読む力が身に付いたり豊かな表現ができるようになったりするであろう。

エ　研究の内容
○　「説明文」「物語文」に重点を置き、「自力で読む力」・「思いを伝える力」を身に付けさせるための授業改善・授業構築をする。
○　言語事項を中心とした国語科の基礎的な力の習熟を目指し、指導を工夫する。
○　学習内容の生活化を目標に、言語環境を整備する。

オ　研究の方法
(ｱ)　授業改善
○　「読むこと」を中心とした目標と評価の明確化
○　個に応じた指導形態の工夫
○　説明文と物語文の学習展開のパターン化
○　「伝え合う」学習場面の設定
(ｲ)　言語事項の積極的指導
○　音読・漢字指導、辞書活用指導
(ｳ)　体験的な言語活動への発展

	○「聞き方」「話し方」のねらいの明確化 ○「話す」「伝え合う」場面の設定 ○読書の日常化

平成16年度	ア　実践研究主題 豊かに表現する児童の育成 －「自力で読む力」・「思いを伝える力」を重視して－ イ　研究のねらい 個に応じた指導や授業改善を通して、児童一人一人の自力で読む力を育てていく。その中で、自分の思いや考えを積極的に伝え合い、学び合い、豊かに自己表現できる児童を育成する。 ウ　研究の方法 (ｱ)　授業改善 (ｲ)　言語事項の積極的指導 (ｳ)　体験的な言語活動への発展

(3)　研究推進体制

学校長

教頭

研究企画会
学校長・教頭・教務・研修・研修副・国語主任

授業研究部	環境部
授業についての研究・提案・実践 ア　実態調査 イ　目標と評価 ウ　個に応じるための指導方法 エ　授業研究の持ち方 オ　家庭学習	言語環境の整備について研究・提案・実践 ア　集会活動（わくわく集会） イ　読書タイム・読み聞かせの会 ウ　俳句指導 エ　漢字コンテスト オ　校内環境

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

(1)　授業改善について

ア　「読むこと」を中心に学習指導要領を分析し、学年で指導すべき内容を明確にした。また、単元目標を見直し「単元で付けたい力」を明確にし、評価表を作成した。その結果、教師がより明確な目標を持って、単元を展開し児童を評価しながら指導することができるようになってきた。

イ　個に応じた指導を行うために、少人数指導やＴＴの学習形態を工夫した。早い段階で教師間の共通理解を図るために、指導体制を書き込んだ単元の指導計画を作成し、前記の評価表をもって指導した。

実践を重ね、複数の教師で授業を行うことに教師自身が慣れ、効果と必要性に対する認識を深めることができた。複数の教師で評価をする効率のよさと客観性の高さは明確である。じっくり学習に取り組めることで、児童の意欲も増している。

また、展開のどのような場面で、どのような学習形態が適切であるかが見えてきた。

（ＴＴ・少人数指導の実践例）

学習形態		学年・教材名	実践内容
ＴＴ		２年 「たんぽぽのちえ」	Ｔ１が全体の指導、Ｔ２が学習中の評価をしながら、遅れがちな児童を指導する。グループ活動やワークシートを使う作業では、分担を決めて指導。評価しながらの指導が可能である。
少	習熟や理解の程度に応じたグループ	６年 「砂漠に挑む」	事前に他の説明文を使い、要旨や要点をまとめる力を調べ、グループ編成。グループの実態に応じたワークシートやヒントカードを工夫。

人数指導	児童の追求したい課題別グループ	３年 「ありの行列」	内容を分かりやすく説明するという目標のもと「音読コース」と「絵本コース」に分かれて学習。学習の進度の調整が難しい。
	等質グループ	６年 「二つの意見から『推測する』ということ」	話し合いの場を小さくすることにより、児童が積極的に自分の思いを発言できる。学習の深まりや広がりの欠ける場面も見られる。
ＴＴ・少人数指導		５年 「わらぐつの中の神様」	はじめの場面は全体をＴＴで、過去の場面を登場人物二人のどちらかに注目して読みを深めるというコース別学習の形態で、最後にＴＴでお互いのコースの読み取りを交流し合うという形態をとった。

(2)　言語事項の積極的指導について

ア　国語科の基礎的な力を育てるために、授業の導入時に漢字ミニテスト、読み仮名練習、文法練習などの時間を設定している。また補充指導の時間を利用して、文章の中でどれだけ漢字や片仮名が使えるか挑戦させている。児童の漢字への興味が高まりつつある。

イ　３学年の教室に児童分の国語辞典を置いた。教材に沿ってあるいはゲーム的に使用し、辞書を日常的に活用できるようになってきた。

(3)　体験的な言語活動について

国語科のみでなく、他教科や生活場面でも「伝え合うこと」を重視している。国語科の学習では、対話を小グループから全体へと広げようとしている。学習・集会等で、発表を楽しみ、友達の話を受けて返すことができる児童が増えてきた。

２．今後の課題

(1)　指導の形態についてより研究を深め、自力読みのための支援や課題設定の方法など具体的に一人一人の力を伸ばす手だてを工夫し実践していく。

(2)　教材の「何を読み取るか」は明確になってきた。これからは、次の読みにつながる「読みの手立て」を明確にしていきたい。身に付けさせたい「読み方」の系統表を作成し、自力読みの力を伸ばす指導に活用したい。

(3)　国語科において客観的な評価が難しい。実用的－適切、簡便、蓄積可能－な評価の方法を探り、児童の変容をとらえていく必要がある。

(4)　音読や漢字等の反復練習が必要な学習について、より具体的な指導方法を工夫実践していく。また、朝の読書タイムを設定したり読み聞かせの会を持ったりしているが、全校的な読書意欲の高まりはまだまだである。家庭学習や読書について、家庭への効果的な働きかけ方を検討する必要がある。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

１．　３年生を対象として、ＣＲＴを６月実施した。児童の変容をとらえるために来年度も３年生で実施、比較検討することを計画している。

２．　５月、既習の漢字の読み書きについて習得率の調査を行った。漢字指導の方法についての検討資料とした。

３．　５月、素読について調査を行った。「つまる」「読み間違う」などの項目に「速さ」を加え、２月に再調査をする。初めての文章をどれだけ読むことができるかを調べ、一人一人の児童の読みのレベルを把握する資料とした。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１．　学校便り、ＰＴＡの広報紙を通じて、学力向上についての取組を紹介した。

２．　少人数指導やＴＴの学習の様子を参観日に公開し、懇談の場面で話し合いを持った。

３．　学級通信、懇談を通じて、各家庭の学習への関心を高める働きかけをしている。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級
■３～１８学級　□１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　■　少人数指導　■Ｔ．Ｔによる指導
□　一部教科担任制　□その他

【研究教科】　■　国語　□　社会　□算数　□　理科
□　生活　□　音楽　□図画工作□　家庭
□　体育　□　その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■　有　□　無